

令和3年度 建設コンサルタンツ委員会活動報告

「シビルエンジニアA・I」意見交換会の記録

「シビルエンジニアA・I 意見交換会」

目的：受発注者が日常業務について意見交換し、円滑な業務の遂行を図る。

日時：令和3年12月16日(木)13:30~16:00

場所：愛知県豊田加茂建設事務所 会議室

概要：冒頭、愛知県豊田加茂建設事務所 仙石忠広所長から『コロナ禍の中、在宅勤務や時差出勤など新たな生活様式において、発注者と受注者がそれぞれの立場から、働き方改革および品質確保における業務への取組み方や課題について意見交換を行い、今後の業界の発展につなげてください。』とのお言葉を頂きました。



仙石忠広 所長

その後、参加メンバーによる活発な意見交換を行い、記録者による意見取まとめ報告の後、仙石忠広所長が講評を述べられ、最後に愛知県測量設計業協会青木拓生副会長の挨拶で閉会しました。

シビルエンジニアA・Iの詳細については、愛知県測量設計業協会HP

<http://www.aisokkyo.or.jp/pdf/iinkai/kenkon/02sibiru.pdf> をご覧ください。

■シビルエンジニアA・I 出席者名簿

コーディネーター	國島 正彦 (協和調査設計)	
記録者	山田 秀穂 (NTC コンサルタンツ)	奥村 和夫 (カナエジオマチックス)
豊田加茂建設事務所 参加者	伊藤 泰広 (河川整備課 課長補佐)	松田 徹 (足助支所建設課 課長補佐)
	吉田 一隆 (維持管理課 主査)	猿渡 一樹 (道路整備課 主査)
愛 測 協 参加者	石川 武 (早川都市計画)	中根 真一 (信栄測量設計)
	竹内 秀幸 (梶川土木コンサルタント)	加藤 健治 (葵設計事務所)
傍聴者	豊田加茂 建設事務所	2名：仙石忠広 所長 ・岩橋正英 企画防災G課長補佐
	愛測協	5名：青木副会長 ・尾藤委員長 ・石堂副委員長 ・日刊建設工業新聞社 ・建通新聞社



意見交換会テーマ 1 : 働き方改革への取り組みについて

発言者区分

■ : 県職員発言

□ : 愛測協会会員発言

1. ワークライフバランスについて

①フレックスタイム

- 愛知県ではコロナ禍の対策として、時差勤務が弾力的に運用され 9 時 15 分出勤とし通勤時の混雑をさけていた。最近では忙しく定時出勤している状況であるため、円滑に作業を進める為の工程管理を行うことが必要と感じる。
- 共働きのため、子育てや家事手伝いが増え、自分なりの生活スタイルとして早期出勤退勤としている。また、テレワークは自宅での作業準備等に時間を要し効率が悪く悪循環に陥っているので自宅での作業内容を整理することが必要である。
- 9 時出勤としているが、周りの職員は自分より後出勤となるため朝礼のあいさつのローテーションが早くなり困っている。テレワークは職場が近い為、効率性を考慮し実施していない。
- 朝 7 時出勤している。子育てもあり、フレキシブルな働き方として活用している。
- コロナ禍より以前にフレックスタイムを全社で導入している。コアタイムは 9 時～12 時とし、従業員はこの前後で勤務時間をとり個々に運用している。また、テレワークは申請制とし、柔軟な働き方に取り組んでいる。
- コロナ禍での時差出勤制を導入している。出社時刻は 7 時～11 時の間で選べるようになり、7 時に出社する社員もみられ、通勤混雑を避け、自分の時間をつくる取組みができていると思う。テレワークも実施しているが、業務上支障はない。
- フレックスタイム導入はしていない。テレワークは試みたが、現場作業を中心の業務が多いため馴染まなく、取り組んでいない。
- フレックスタイムは導入していない。勤務時間は 9 時から 17 時 30 分で、運用している。



意見交換風景

②ウィークリースタンス

- 現場サイドの運営とは乖離を感じており、あまり意識はしていない。要は受発注者間でうまく仕事を進めることが大切だと思う。
- ウィークリースタンスについては、事務所内では金曜日の会議は避けるようにしており、また受注者との打ち合わせ等も相互に理解し合い意識付けがなされている。
- 愛知県の業務では、かつてよりも期日の厳しさが減った印象を受ける。
- 受注者側からウィークリースタンスについて提案することは無かったが、以前よりは週末の打ち合わせや作業依頼が少なくなったと感じている。

③残業時間の短縮・有給休暇取得

- 事務所内では毎週水曜日、毎月 19 日はノー残業 day としている。当日は各職員の声掛けもあり、徹底できている。その反面、設定日以外の残業時間が増えてしまう傾向の職員も見受けられるため、職員の配置や適切な作業量などの課題解決が重要である。
事務所内の有給取得日は年間 14 日取ることを目標としており、時間休などを活用し、効率的に休みを取っており、順当に休暇を取得でき目標は高いハードルとは感じていない。
- 毎週水曜日は上司からの声掛けもあり、ノー残業 day に取り組んでいる。が、どうしても処理しないといけない業務がある場合は、水曜日でも残業も止む無くしている状況である。
- 残業をしないよう平日頃から意識はしているが、どういうふうに効率的に仕事を進めるか、時間短縮につながるかを試行錯誤している。

- 平日は 22 時に強制消灯、土日は消灯（出社禁止）と、長時間労働抑止に対して徹底している。よって残業や休日出勤は申請制となっている。有給は時間休ではなく、全日か半日しか選択できないため個人的には半日有休をとって健康診断等に充てている。
- 土日曜の休日出勤は申請制となっている。個人的に通勤時間に 2 時間半ほどかかり、若い人材からの質問も多く、その対応後に手持ちの仕事をこなす日課となっており、残業はやむを得ないと思っている。
- 残業時間カットの取組みは特にしていない。ノー残業 day は社として取組んでいるが、現場へ出向く作業も多く帰社が遅くなり、取組めていない。振替等の処置を考慮する必要があると思う。

2. 生産性の向上

業務の効率化（ICT導入）

- 業務の効率化を目的とした ICT 導入工事の発注は、担当としてダム放流設備改修に伴う下流浚渫工事において 4 件の実績があり、その際、受注者から「ICT 機械等を導入したら元のような工事には戻れない」と謳うほど効率性、安全性、機動性に優れたものと認識している。ICT 工事に関しては歩掛がない場合は業者見積の発注という運用となっているが、それも初期投資と考え今後の工事の主軸を担うものと思われるので、ぜひ推進していきたい。
- ICT 導入の土工事を試行的に取り組み意欲がある業者もみえる。また、工事の出来高検査はドローンを用いて空撮で行い、レーザー測量にも取り組み、効率性を高めている。
- 計画、調査、設計段階から 3D モデルを導入し、その後の施工、維持管理においても 3D モデルを連携させることで、事業全体にわたり関係者間の情報共有を図ることが目的である。しかし、現状は、工務、整備、維持管理と体制が縦割りとなっており、情報を共有できる状態になっていない。まずは組織改革を図り一体となった取組みができる体制づくりが必要と感じる。
- ドローンを用いた 3D 設計を試したことはある。会社がこうした新技術の導入には積極的であるが、社員の高齢化のため 3D-CAD はベテラン社員が講習会等で習得し、若い世代へ実務を体験しながら教育（OJT）をしているのが現状である。
- ICT 導入に際しては、馴染みやすい若い世代が必要と思うが、若い人材が入ってこない。人材を確保することが課題である。

意見交換会テーマ 2 : 品質確保について

1. 設計内容の明確化

①設計条件明示チェックシートの活用

- 設計条件の設定は基本的に基準書や構造令に準じて行うが、現場状況に応じた検討により条件設定を行うこともあり、チェックシートだけでは対応できない場合があることからチェックシートを活用していない。
- 委託業務では、地元説明や対外協議などのタイミングで、資料ができていないか否かを確認している。協議の結果や進捗により業務全体の工程管理を行うことが難しいことから、業務期間中のチェック行為の時期などの業務スケジュール管理を確認するものとしてチェックシートを使用していない。あくまで、業務内容を確認するためのシートとして使用している。
- 委託業務では地元説明、関係機関協議がポイントとなり、これらに向けて委託業務の初期時点での適切な条件設定を行いたい為、委託内容に則したマネジメントを受注者側にお願いしたい。
- チェックシートにより若手社員に対して作業手順、方針などが明確にすることができることから、チェックシートを活用して作業上の指導ができる。

②受発注者による合同現場調査

- 合同現場調査については、委託設計書には極力計上しており、合同現地調査は大切であると考えている。発注者の目線と受注者の目線の違いをすり合わせるができる。

- 現場合同調査の実施については、仕様書に記載があり最近多くなっており、仕様書に無い場合でも現場での確認という目的で合同現場調査を発注者に提案している。
- 合同現場調査の実施時期については、初回打合せ後、または設計計画が固まった時点での現場確認のために合同現場調査をお願いしている。
- 現場のネックとなる対応箇所などを発注者と現場で確認でき共有できる。
- 発注者と受注者（コンサル）とでは、問題点への目線が違う場合があり、相互の視点から確認できる。

2. 技術力の継承

①若手育成

- 担当業務を一人で完結できるようになってほしいとの思いから、とりあえずやってもらうが、フォローすることが大切である。
- 業務での自分の経験や上司などに教えてもらったことを伝えている。
- ナレッジマネジメント（知識共有）として、若手が活用できるように過去の業務成果を検索できるシステム作りや年数回の基準書説明会やソフトの操作方法などの社内研修を行っている。
- 月一回の社内全体会議にて1時間ほど業務報告会を催していたが、新型コロナウイルス感染症の影響で現在は実施できていないが、今後はコロナ禍での新たな作業スタイルを考える必要がある。

②ミス事例集の活用

- 多忙期間中業務を行いながら事例集を確認することはないが、年度初めなどの時間的余裕があるときに新しいミス事例集に目を通してミスの事例を確認する。



意見交換会 傍聴風景



意見交換会 発表風景

仙石忠広 所長 講評要旨

昨今のコロナ禍の厳しい状況下において、発注者と受注者の意見交換会を開催できたことは大変有意義なことであると思います。また、職員並びに愛測協会員の今日の生活スタイルを知ることができ大変参考になりました。

今回の議題である働き方改革ではフレックスタイム等の導入がなされていますが、職場環境などの違いで、各部署・会社においてまだ取組内容に差があると感じました。また、品質確保に於いては、良い成果を仕上げるための職員又は社員の教育を進めるなかで、若手の人員不足が共通の課題であり、今後解決すべき問題と思います。

今後も、発注者、受注者の相互理解により、より良い成果品の品質確保に取り組んでいただき、適切な公共工事の発注に向け、引き続き協力をお願いします。